

成長する博物館をめざして —羽村町郷土博物館4月オープン—

羽村町教育委員会
桜沢喜作

羽村町郷土博物館（仮称）は、多摩川「羽村堰」の上流右岸、背景に都立草花丘陵自然公園を配した自然環境に恵まれた場所に位置し、4月オープンに向けて準備中である。

昭和56年当初は、700㎡程度の郷土資料館とすることで設計費が予算化され契約の運びとなっていた。この時点では、規模、内容とも担当者の意図とかなり隔たりがあった。

設計段階に入り町議会、教育委員会の合同視察を計画し、平塚市博物館、台東区立下町風俗資料館を視察した。この二つの特色ある博物館を視察したことによって、どうせ造るなら羽村町にふさわしいものという雰囲気を作り出すことができた。更にこの視察がきっかけとなり、博物館建設協議会及び同展示専門委員会を設置して、慎重に検討していくことになった。

建設協議会及び展示専門部会は数回の会議の後、羽村町郷土博物館（仮称）建設に関する基本事項について、次のような答申がなされた。

- (1)博物館法に規定する登録博物館として、教育活動を推進する住民参加の博物館とすること。
- (2)羽村町の特色を出すため、玉川上水をメインテーマとすること。
- (3)物を「見る」だけの博物館から「さわってみる」「作

- ってみる」ことのできる博物館へ工夫すること。
- (4)建築面積は、1500㎡程度が適当であること。
- (5)展示室、収蔵庫とも将来のことを考慮した配置及び工事をする事。
- (6)展示については、屋内展示と野外展示に区分して考えていくこと。
- (7)屋内展示については、4ブロック（A羽村の自然、B羽村の歴史と文化、C玉川上水とまймаいず井戸、D大菩薩峠の世界）とすることが望ましい。
- (8)野外展示については、国指定重要有形民俗文化財「旧下田家住宅」、中里介山の遺品「赤門」を復元し、中庭に植栽する草木についても野外展示としての感覚を取り入れ、博物館内外を通じて展示の一貫性を図っていくこと。

以上が答申の主な内容であるが、当初から比較すると建築面積、展示内容とも担当者の考えに近いものとなり、結果的に大変よかったと思っている。

さて、この答申を受けて設計に着手したが、建設地が多摩川河畔の自然環境に恵まれた場所のため、いろいろな規制があり苦慮した。河川敷の隣接地のため河川法の適用、都立公園、緑地、市街化調整区域と、それぞれ関係機関の承認を受けなければならなかった。

建物については、周囲の環境に融合させるため、鉄筋コンクリート造りの四角すいの屋根を持つ建物を全て銅板で覆ったユニークなものとした。

昭和58年はいよいよ建設に着手する年となった。当然のことながら文部省の社会教育施設整備費補助金を申請した。情勢は厳しく、一次査定ではもれてしまったが、一日千秋の思いで待ちわびた第二次査定の内示を9月2日に受けた。工期は翌年3月までの短かい期間であったが、なんとか年度内に建物工事を完成することができた。これもひとえに都教育庁社会教育部、文部省のご理解によるものと深く感謝している。

本年度は、博物館の総仕上げとして展示・外構工事を施工中である。博物館の心臓部ともいべき展示については、答申の中でも羽



4月の開館を待つ羽村町郷土博物館（仮称）

村町の特徴を出すこと、展示方法に工夫をこらすこと等の注文がついている。

展示テーマの中で特色あるものとしては、「玉川上水とまいまいず井戸」と「大菩薩峠の世界」である。この二つのコーナーを満足させるには、まだまだ資料が不足している。玉川上水関係については、資料の入手が困難なため、今後とも東京都水道局をはじめとした関係者の協力を仰いでいかなければならない。中里介山関係についても、記念館に収蔵されていた資料の

ほとんどが(財)日本近代文学館に寄贈されてしまっているので、入手は困難になっている。しかし、現在はなくとも将来にわたって積極的に資料を収集し、また研究の成果を展示していくという「成長する博物館」を目指していきたい。

設計に着手してから4年の歳月をかけて完成する博物館の運営については、時節柄大変厳しいものがあると思うが、この問題に対しても担当者の熱意により、理解を求めていきたいと考えている。

(仮称)清瀬市郷土博物館の展示について

清瀬市郷土博物館開設準備室 山中久子

(仮称)清瀬市郷土博物館は昭和60年秋の開館を目指して目下建設中である。敷地面積 3393㎡ 建物延面積 2207㎡(地上2階地下1階) 場所 清瀬市上清瀬2丁目6番41号。清瀬駅と市役所のほぼ中間で目抜き通りを少々入った所である。

当館では、広い意味での展示が八つのブロックに分けられている。(以下ブロック名は仮称)

(1) インフォメーション・センター

入口を入ってすぐの場所で、立体地図・ビデオ・パンフレット等により「郷土清瀬」を紹介する博物館の導入部である。

(2) 展示ホール

両サイドが素通しのガラスで、そとの自然と調和した

プロムナードの雰囲気を期待している。中央部に地理地質関係の模型、奥の壁には清瀬の村をえがいたレリーフを飾る。

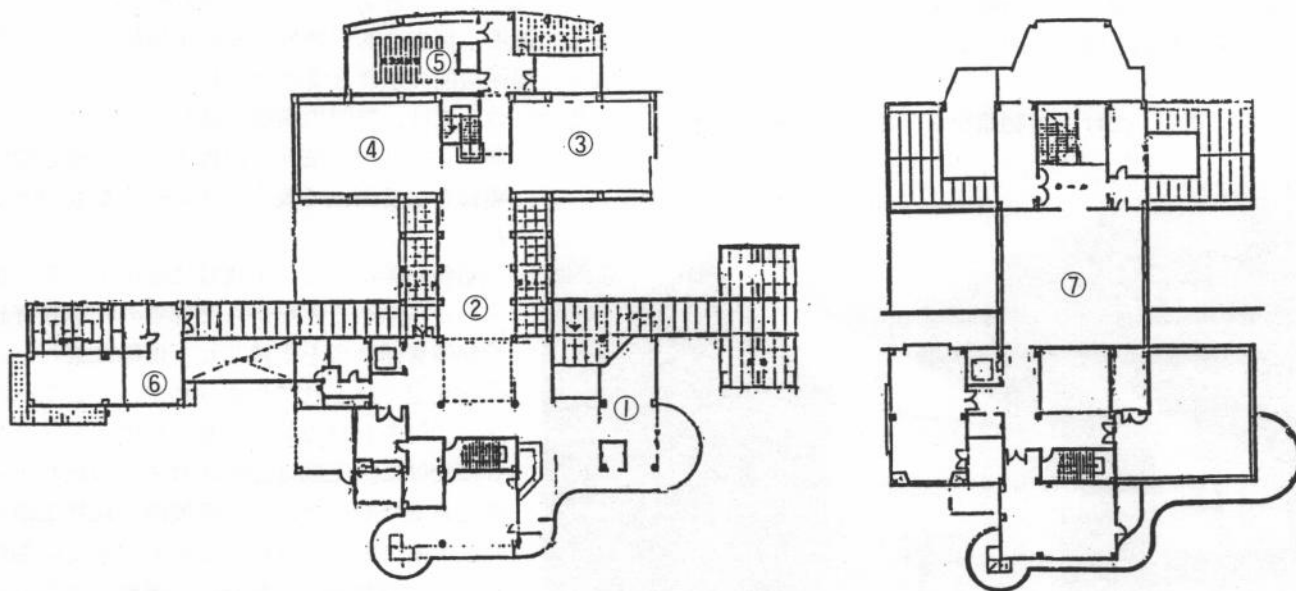
(3) 歴史展示室

この部屋は一巡すると清瀬の歴史が把握出来るような展示を目指している。幸い市内には十年近い年月をかけて調査した下宿内山遺跡があって原始から現代までの遺物が出土しており、古文書や伝承資料とあわせて、忘れられた歴史を掘りおこし展示する。

又原始・古代・中世・近世の各時代を数分間の短い映像で見せる小さなVTRが4台設置される。

(4) 民俗展示室

民具や年中行事などを通じて、昔の暮らしの知恵が感



(仮称)清瀬市郷土博物館平面図

- ①：インフォメーション・センター ②：展示ホール ③：歴史展示室 ④：民俗展示室
 ⑤：映像展示室 ⑥：伝承スタジオ ⑦：ギャラリー

じられるような展示替えをする。農具等の一部は四季の生産に合わせて展示する予定である。

(5) 映像展示室

6面のマルチスライドが目玉で、清瀬の過去・現在を幻想的に表現する作品を委託製作中である。そのほか16mmフィルム、ビデオテープ、普通のスライドなどの機器類も用意され、館の事業ばかりでなく市民がグループで手づくりの作品を上映するなどにも利用していただく予定である。

(6) 伝承スタジオ

本当は古民家が理想であるが、それに近い和室と板間と土間がある。いろいろとへっつい薪を焚くので本館から少し離れている。郷土料理・機織り・わら細工

土器陶器作り等さまざまな作業を通じて先人の知恵と工夫を伝承する、いわば道具と働きの展示である。

(7) ギャラリー

これからの博物館は地域文化創造の拠点とならなければならないという考えから博物館活動の一環として積極的な姿勢で作られたもので、創造活動の発表の場である。博物館の特別展示もここで行われる。

(8) まわりの植栽

建物のまわりの植栽に清瀬の自然を反映させる植物を選び、出来るだけ武蔵野台地の自然を展示する。

以上であるが展示の作業はこれからである。唯見るだけでなく、来館者自らがやってみる展示になるよう考えている。

立川市歴史民俗資料館(仮称)の設置について

立川市教育委員会社会教育課長 望月 登

立川市では、市の歴史や文化、自然風土に関する市民の知識と理解を高め、そこから新たな市民文化の創造を図り、合わせて郷土への愛着と住民相互の連帯感を高めることを目的とする、立川市歴史民俗資料館の設置を計画しています。開館は、昭和60年12月に予定されています。現在は、本体の建設工事と展示の実施設計などを行っています。

場所は、市内富士見町3丁目で、立川の西南端にあたります。近くには寺院や東京都立農業試験場のある、閑静な住宅街の一角に位置しています。

もともと、資料館の建設される土地は、市文化財保護審議会会長・井上重雄氏の屋敷でした。その屋敷の一部、約850坪を、市の文化財保護のためにと、井上氏が市に寄贈されたものです。

建物は、鉄筋コンクリート造りの2階建てで、延床面積は995㎡あります。1階は、展示室(188㎡)、講座室(53㎡)、事務室(36㎡)、補修工作室(49㎡)など、合計633㎡。2階は、収蔵庫(198㎡)、特別収蔵庫(65㎡)など、合計362㎡となっています。この内訳

からもわかるように、展示よりも、資料の収集や保存、調査研究に施設の重点を置いた資料館であるということが出来るでしょう。

次に、展示については、(1)自然と人間のいとなみ、(2)立川のきのう、きょう、あす、(3)未来に伝える先人の知恵や知識、以上の3点を基本テーマとしています。この資料館では、展示室が一つしかないこともあり、展示は常設展示が中心となります。常設展示では、立川の自然と歴史の流れを知ってもらうことに重点を置いています。その展示テーマは、(1)立川の自然環境、(2)立川のあゆみ、(3)立川の民俗、以上の3点です。

また、土地とともに寄贈された土蔵を改修・移設しましたが、将来は、収蔵庫として利用することも考えられています。昭和60年に予定されている植栽(造園)工事については、周辺の自然環境を考慮した計画が立てられています。

最後になりましたが、今後ともより多くの方々のご指導ご協力をお願いするとともに、開館した暁には市内内外の多くの人々のご来館ご利用をお願いいたします。

「オオムラサキの誕生」

五日市駅より西北西約1kmのところに、樽という自治会がある。ここが今回オオムラサキを撮影した場所である。ここは、サンショウウオやホタルなど自治会ぐるみで保護に努めているところで、その世帯数わずか46世帯と五日市町でも小さな自治会である。その自治会の自然保護委員(3名)の中に、当館が運営協議

五日市町立五日市町郷土館

栗原 達夫

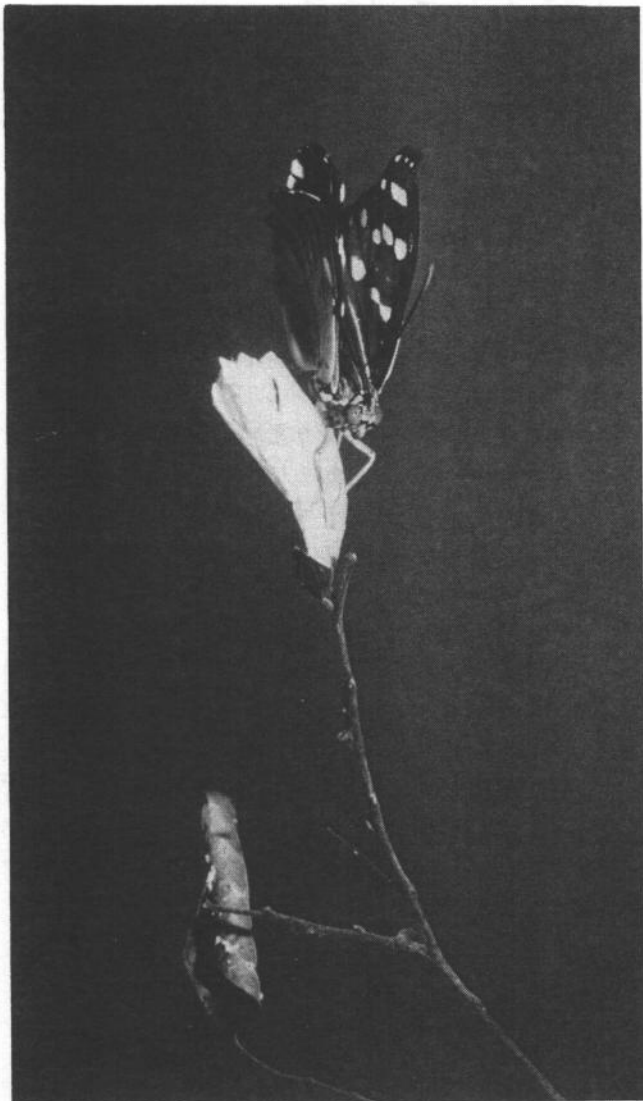
会委員として委嘱している樽良平氏がいたのである。

樽氏は、57年からオオムラサキの飼育・放蝶を手がけており、58年には数を増したいとのことであった。その話を聞いた時、オオムラサキの一生をビデオに記録できたらすばらしいと思い、樽氏に撮影許可を御願いした。飼育されているのであるから、比較的簡単で

あろうと考えていたのである。

しかし、その考えは非常に甘かった。

いくら飼育されているからといっても、相手は生きもので自然の状態なのである。私も郷土館係長としての業務があり、ビデオ作りにかかりっきりという訳にはいかず、オオムラサキの都合に私が、どの程度合わせられるかが、大変な作業となった。それで、しかたなく撮影半ばにして今年は幼虫まで、来年は幼虫からサナギまで、そして次は、サナギから羽化・成蝶までと三年計画でいこう、と考え撮影を打ち切ることにした。ところが、Y新聞社が記事にしたため、読者から「完成はいつごろですか」などの問い合わせがあったり、テレビ局から取材の依頼があったりで、やめるにやめられなくなってしまったのである。



羽化直後のオオムラサキ

昭和59年7月3日午前10時。観察中のサナギがだいぶ黒くなっていることに気づいた。

私はオオムラサキの生態について全く知らないため、サナギの成長に合わせて勉強をしながら撮影を続けていたのである。

それによると、羽化する前にはサナギ全体が黒ずんでくるとある。しかし、どの程度黒くなると羽化が始まるのか、体験がないのでわからない。しかたがないのでサナギから目を離さないことにした。

午後0時撮影準備完了。あとは羽化を待つだけである。

————— 観察ノートより（抜粋） —————

午後2時。ほとんど変化なし。

午後4時。10時のときより黒味が増したようだ。

午後8時。多少黒味が増したようだが大きな変化はない。この分だと今夜の羽化はないだろう。しかし、万一ということがあるので観察を続けたいが、屋外で1人で観察するのは危険である。樽氏の了解を得てサナギのついている枝ごと郷土館の研修室へ運んで観察を続けることにした。

7月4日午前0時。ほとんど変化はない。室温27℃。むし暑い。冷房を入れたいがサナギのためにあきらめる。

午前3時30分。ほとんど変化はない。この分だと当分羽化はないだろう。すこし寝ることにする。パンをすこし食べ、ビールを1本飲む。4時、酔いのせいか眠むくなってきた。

午前6時25分。目覚める。急いでサナギを見るが、羽化はしていない。ホッとする。

午前10時。観察を始めてから24時間たった。大きな変化はないが黒味が増しているようだ。しかし、本当に生きていいのか心配になってきた。

7月5日午前5時30分。サナギが黒から白っぽくなった。サナギの表皮とチョウの体との間に空気が入ったようだ。これはもうすぐであると感じ、撮影機材のチェックを行なう。

午前5時39分。突然サナギの上の部分が割れた。羽化が始まったのである。すぐにビデオのスイッチを入れる。観察を始めてから43時間39分を経過していた。蝶の体が全部出るまで約2分30秒。（個体によって違う）その最後の瞬間羽根がコバルトブルーに輝いた。すべてが終わった。帰路につく疲労感がさすがにしかった。

その後羽化シーンを何回か撮影したが、長い時間を費いやすことはなかった。43時間以上もサナギと睨めっこをした成果である。

撮影中は、生命誕生の神秘さなど数多くの感動を味わった。生物たちの強さと弱さも知ったのである。

バードカービングによる展示

東京都高尾自然科学博物館
新井二郎



東京都高尾自然科学博物館の野鳥展示コーナーに、バードカービングによるジオラマが加わった。バードカービングとは、木を彫って作った鳥で、剥製に代わるものである。すでに平塚市博物館にバードカービングの展示があるので、ご存知の方も多いと思う。最近のバードカービングの技術はすばらしく、本物の鳥と見間違ふほどである。

高尾博物館の野鳥展示は、これまで剥製を使ったものであったが、最近剥製に傷みが目立ち始めたので、まずそれが特にひどい「カラ類の群れ」のジオラマを、新たに得られた知見を入れて展示更新した。

目的によっては実物の剥製が必要だが、今回のジオラマでは、群れとなって行動するカラ類の生態を知ってもらおうという意図なので、剥製の必要はなく、いろいろな動きをきれいに表現できるバードカービングを取り入れてみた。もっとも、新しい展示をまかなえるだけの数のカラ類の標本が当館になかったのだが。

冬の雑木林を表現したジオラマの中に、シジュウカラ・ヤマガラ・エナガ・コゲラなど6種15体のバードカービングが、枝にとまったり、飛んだり、地上で餌をさがしていたり、とさまざまな姿で入っている。せまい展示スペースではあるが、このジオラマは、生き生きとしたカラ類の群れの姿を表現できたと思う。

職員紹介

加藤 研氏
(青梅市郷土博物館管理係長)



加藤研氏。59年10月1日、郷土博物館管理係長として着任。37歳。勿論一選抜の係長。同期の者にさきがけての昇進者だけに、将来に最も期待をかけられている俊材である。庶務課、社会教育課、市民懇話室公報係を歴任しての着任で、市役所の機構・活動に精通している

るだけに、企画・立案・実施は極めて優秀。上司は云うに及ばず、同僚・後輩からの信望も絶大である。

明敏な頭脳と体力に恵まれ、強い責任感と判断力を加えた自己に厳しい勤務態度は、市役所内に右にでる者は少く、博物館の発展にも大いに寄与されよう。

明朗で活動的は人柄は誰からも好かれ、更に男性的な面立や音声でモテることも人一倍。愛妻がミセス市役所と称せられるのも頷かれるわけである。市役所課税課勤務の愛妻美佐子さんとの間に一男一女に恵まれ、豊かで和やかな家庭生活を楽しんでいる。趣味としての写真の腕は公報時代に磨きをかけてプロの域に迫り、将棋は自称三段、麻雀の腕前も相当である。

収蔵資料紹介

奥多摩郷土資料館

硬玉製垂玉

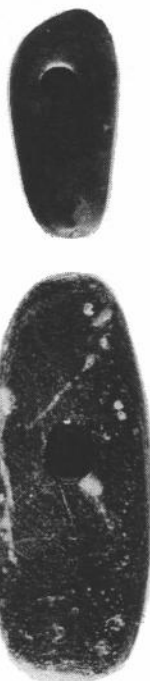
小丹波・滝の平(国鉄青梅線・古里駅北側)の畑道で採集された縄文時代後期(今からおよそ3500年前頃)のものと思われるヒスイの首かざり。

原石の産地は新潟県の糸魚川上流と推測されています。写真ではわかりませんが、緑と白い部分が天然に混じって大変美しく、またこれを二つに分けようとしたあとがあります。

滑石製垂玉

白丸・西の平の畑で採集されたもので、滑石(ろう石)の首かざり。

二つの首かざりは採集者から町へ寄贈され、郷土資料館に保存されています。縄文時代の生活や氏族の発展、交易などを知る上での貴重な考古資料の一つです。



(約0.8倍)

〔昭和59年度展示活動報告〕

館名	展示会名	期間	内容
青梅市郷土博物館	青梅の織物今昔	59.2.19 ～60.4.30	青梅縞の名で広く知られている青梅織物の歴史を綿織物中心にたどり、関係古文書や織機類、生産品等を展示し、併せて青梅綿関係のものも紹介。
	多摩川の自然誌 —その生いたちと 水生昆虫—	59.7.20 ～60.2.28	地質時代からの多摩川と武蔵野台地の形成と今日の多摩川の流量・水温・濁度等の表示、岩石(断面)魚類の展示、水生昆虫の生態等を紹介。
調布市郷土博物館	郷土学習展 「村から町へ」	59.1.5～4.8	明治以来の行政区画の変遷と、生業や人々のくらしぶりなどの都市化につれて変貌する郷土のようすを収蔵資料を中心に紹介する。
	テーマ展 「食の文化展」	59.4.18～7.8	原始・古代から現代までの食生活の変遷を概観する。
	テーマ展 「通信の歴史」	59.7.18～9.30	古来、遠隔地と連絡をとるため、いろいろと工夫されてきた方法を紹介した、社会の発達に応じた郵便や電信電話の役割を考える。
	開館10周年 記念特別展 「甲州街道」	59.10.13 ～12.20	甲州街道は五街道のひとつとして重要な交通路とされてきた。そして市内では市域中央を貫通しており、近世以来、私たちのくらしとも密接な関わりがある。この展示では往時の甲州街道の様子と街道と人々のかかわりについて紹介する。
	郷土学習展 「おじいちゃんの 時代展」 ～子どもの暮らし～	60.1.5～4.7	明治から昭和初期にかけての子どもの生活を中心に、変わってきたくらしの様子をふりかえる。
八王子市郷土資料館	東京オリンピックと 八王子—当館収蔵の 自転車競技資料を中 心に	59.7.1～8.19	昭和39年に、第18回オリンピック競技大会が東京で開催され、八王子市が自転車競技全種目の会場となった。それから20年を経たこと、この間地域が急激に変ぼうしたことなどから、オリンピックと地域のかかわり合いを考えるため、当館収蔵資料を展示。
	八王子の織物—養蚕 から織物まで—	59.10.16 ～12.9	当館で、今までに収集した養蚕・製糸・撚糸・染色・製織の用具や記録類を展示。
	人物コーナー「月江 と青郊」	60.2.15 ～3.17	八王子出身の足利学校第16代、および第17代座主(学校長)月江と青郊を紹介する。
東村山市立郷土館	農業のくらし展	59.5～	古くは農業を中心とした土地で、土と汗ににじんだ農具、生業とした民具、生活態様として使われていた儀礼用具等を展示し当時の思い出を偲ぶ。 館そのものが狭隘なので工夫をこらしながら展示替を配慮している。
	こどもの遊び展	59.4～	昔は手づくりの遊び具を作ったり、利用しては近所の友達とよく遊んだ、既製品のコマやメンコを買い求めては汗や泥んこになり遅くなって帰宅することもあって、当時の遊ぶ道具にしても今のようになり電池や電気で動くものではなく、竹や木で作ったものがほとんどでまさに「手づくりの味」が象徴されるものとして現在も展示を続けています。
府中市立郷土館	むさし府中の自然展 「府中の化石」	59.7.22 ～9.9	自然調査の研究成果にもとづく定期特別展。府中市是政の多摩川河床から採集された貝化石と植物化石を中心に展示し、府中がまだ海の時代であった頃の古環境を理解する。

福生市郷土資料室	市民芸術文化祭参加「刀剣展」	59.11.3~11.5	市民が所蔵及び製作した刀剣武具等の展示。
	春季特別展「多摩川の漁具」	60.3.9~5.4	かつて多摩川は献上アユ等で有名であり、全国でも六玉川といわれるほど水が澄み、魚影も色濃いものであった。今回の展示では、かつて多摩川で使用されていた漁具を展示し、併せて代表的な伝統漁法を紹介する。また館蔵資料のみならず広く多摩川中流域の漁具を展示して、多摩川再考の一助とする。
	漢詩人・大沼枕山 —俳人友昇をめぐる人々—	60.2.1~2.28	市内出身の明治初期に活躍した俳人、森田友昇と交友のあった漢詩人、大沼枕山、平塚梅花ら多摩地域と由縁の漢詩人に関わる資料展示。
	絵で見る「玉川上水とその周辺」	59.6.13~7.9	市内を西から東へ貫流する玉川上水とその周辺の風景と人々のくらしぶりを昭和30年代に描かれた水彩画から探る。
	絵で見る西多摩の風景「奥多摩旅情」	59.10.31 ~11.26	奥多摩の玄関口に位置する当市は、市民の憩いの場そして故郷として奥多摩に愛着をもっている。昭和30年代の奥多摩風景を水彩画によって展示。
町田市立博物館	植物標本展「福生の植物—林の植物—」	59.7.25~10.3	郷土資料室で収集し、保存している植物標本の中から、福生市内の林に見られる植物を選出し展示した。(高木層12点、低木層12点、草木層11点、つる植物5点)
	大むかしの町田展 —縄文の生活具—	59.4.17 ~5.27	最近調査された未公開資料も含め、市内15ヶ所の遺跡から発見された縄文時代の生活具を紹介。
	武相の鱈口展	59.6.5 ~7.15	武相地域(埼玉、東京、神奈川)にのこる鎌倉時代から江戸時代の鱈口を、金工史の中でとらえて展示。
	籠・バスケットリー・編みの世界	59.7.24 ~9.9	籠は、編み(組み)の技術で造る容器。素材と造りから日本と世界の籠を展示。
	第2回国際版画美術館収蔵作品紹介展	59.9.14 ~9.24	昭和58年度に購入あるいは寄贈された作品を紹介。
	かわらばん展	59.10.2 ~11.25	火事、地震、仇討、心中、政治的事件などをいち早く庶民に伝えた江戸時代のかわらばんを展示。
	19世紀アメリカインディアンの染織	59.12.4 ~60.1.27	様々な展開を示すアメリカインディアンの工芸の中から、ブランケットとよばれる織物を中心に紹介。
	第3回国際版画美術館収蔵作品紹介展	60.2.1 ~2.11	昭和59年度に購入あるいは寄贈された作品を紹介。
	民具・生活の知恵 同時展示・町田の草花	60.2.19 ~4.7	民具は、先人の知恵の結晶。思わずはっとさせられます。併わせて、町田の草花の世界をのぞいてみます。
	わが町の秘仏展	59.11.1 ~11.6	文化祭の一環としてわが町の秘仏展を開催、七つの寺院の本尊を正面およびやや横の二ヶ所をカラー写真にとりパネル展示、床面には、十人から借用した仏像を飾った。
武蔵村山市立歴史民俗資料館	特別展「吉祥山遺跡」	59.7.22 ~11.4	過去7年間にわたる吉祥山遺跡の調査の成果について、220点の出土遺物を中心に展示し、吉祥山遺跡が狭山丘陵とその周辺地域でも特筆すべき重要な遺跡であることを紹介。
	写真展「武蔵村山の今と昔」	59.11.18 ~12.27	昭和58年度から開始した写真資料の収集において整理のついた写真の公開を目的としている。
	作品展「子供達のつくれた縄文土器」	60.3.3 ~3.24	今年度は航空写真11点を中心に展示し、市内の様子の移りかわりを紹介。 昭和59年8月に行った縄文土器づくり教室において、子供達が作成した土器を展示。

井の頭自然文化園	水と生活展	59.4.1~8.31	江戸時代初期、徳川幕府により政治、経済等の中心地となった江戸の急速な人口増大により、給水の必要も増大した。井の頭池を源泉とする神田上水が江戸の町内にひかれて、日本初の上水道となった状況を、江戸名所図会より引用して着色図示したパネル展。併せて当時の木樋（水道管）、井戸と、その用具、水と交通（水運）、消防用具を展示。
	井の頭の野鳥展	59.9.31 ~12.31	都市化の波による自然の喪失に対して、自然の回復、人間性の回復を意図して、井の頭の野鳥を紹介、かつ、積極的に野鳥を招く願いをこめて、鳥の水場、えさ場等をパネル及び現物で展示。
	丑（牛）年に因む展示	60.1~	十二支の丑（牛）の生態、種類について、世界各地の19種類、牛と人間生活にかかわる宗教（信仰）、考古、民俗学的考察等のパネル展示。
東京都武蔵野郷土館	小金井公園30年のあゆみ展	59.1.10 ~59.5.6	小金井公園開園30周年を記念して、公園開設までの経緯、開園から30年間の移りかわりを、年表、図表、写真などのパネルを中心に紹介する。
	特別展「江戸の発展と庶民の生活」	59.1.10 ~59.5.6	江戸の発展の様子を江戸図のパネルで紹介し、旧江戸市中より出土した遺物を通して、江戸の発展を支えた庶民の生活の一端を紹介する。
東京農工大学工学部 附属繊維博物館	特別展 『ひと目でわかるニット展』	59.5.19~5.27	手編から機械あみまで。ニットの歴史・技術がひとみればわかるよう展示した。
	化繊百年展	59.11.10	人絹から宇宙服まで、化繊の発明からちょうど百年。百年を記念して化繊の現状を考察した。
	ミニ展	~11.18	蚕糸関係・和紙など最近収集した資料を展示。
	故岡野正一郎 寄贈品展	59.4.2~5.31	亀山、中村コレクション公開約4000点。
	燐標木版画展	59.6.11~7.20	故牧野成昭の紙彩画(100号)を中心として20点。
	和紙工芸展	59.7.25~9.27	日本各地の伝統的な手織をミニチュアとして複製30台。
	日本の手織機模型展	59.10.31 ~10.27	手織作品（着物、セーター。反物など50点）。
	手織作品展	59.11.6~11.21	徳島藍による型染、絞り染の作品50点。
	天然藍による染物展	59.11.28~12.20	麻やもめんを始め搦布、ぜんまい布など日本古来の繊維を展示約30点。
	自然からとった糸と 布展	59.12.24 ~60.1.29	春夏をイメージデザインしたテキスタイル作品約30点。
テキスタイルデザイン 作品展	60.2.1~3.1		

編集後記

本年度、立川市教育委員会、清瀬市郷土博物館開設準備室、東京都武蔵野郷土館、東京都井の頭自然文化園が新しい仲間となりました。これからの益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

各館より多大なご協力を賜わり編集もスムーズにゆき、発刊することが出来ましたので厚くお礼を申し上げます。

なお、展示活動の原稿が多くよせられましたので、特別展示のみといたしました。

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
〒183 調布市小島町3-26-2
調布市郷土博物館内

☎ (0424) 85-1164

編集委員：川松康人 阿賀英男
佐藤 広 横尾友一

印刷：(株)天沼印刷

調布市富士見町1-9-24